CHIBA UNIVERSITY

# News Letter

VOL. 10

2020年度

看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属
看護実践研究指導センター
Center for Education and Research in Nursing Practice,
Graduate School of Nursing, Chiba University

## 看護実践研究指導センターの今後について

千葉大学大学院看護学研究科附属　看護実践研究指導センター長　和住（わずみ）　淑子（よしこ）

新型コロナウイルス感染の拡大に伴い、今年度は、年度当初より、当センターの研修事業にもさまざまな影響が出ました。まず、年度当初に、すでに受講者募集を開始していた「国公立大学病院副看護部長研修」の中止を決定し、「看護管理者研修」「看護学教育指導者研修」「看護系大学FD企画者研修」については、開催時期を年度後半に先送りにすることとしました。しかし、感染の収束がままならないことから、最終的にはやむなく今年度の開催は中止いたしました。当該研修への参加をご希望されていた皆様並びに研修開催を見込んで組織の人材育成計画を立てておられた皆様には、大変ご迷惑をおかけしました。心よりお詫びを申し上げます。また、「看護学教育ワークショップ」につきましては、初めてのWeb開催とし、盛会のうちに終了することができました。こちらにつきましても、ご参加、ご協力いただきました皆様に深くお礼を申し上げます。

なお、次年度からの研修は、これまでの研修内容・方法を見直し、参加者相互のピア・コンサルテーションを主体とした課題解決型研修へと大幅にリニューアルすることを予定しています。この新事業は、「“Society5.0看護”創出拠点－ピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略－」という名称で進めていくことにしております。次年度以降の研修につきましては、決まり次第ホームページ等でお知らせをいたしますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

このように、当センターは、時代の変化に即して、これまでの知識提供型の集合研修の在り方を大きく転換し、「利用者相互のピア・コンサルテーション型研修」を新事業の柱に掲げ、推進してまいります。

この方針転換に伴い、現名称「看護実践研究指導センター」の「指導」が、新事業の核となる理念である「ピア・コンサルテーション」にそぐわないため、令和３年４月１日より、名称変更をする予定です。新名称は、「看護実践・教育・研究共創センター」となります。この名称は、当センターが提供する機会を活用する全国の看護職やその所属組織が協働して、実践・教育・研究を含む看護学を開発していく拠点という活動理念を表現したものです。

当センターは、実践・教育・研究の良循環を通して、山積する社会的課題の解決に看護学の立場から貢献し、国民の健康の増進に資するものとなるよう、今後も活動を続けていきますので、皆様のご活用をよろしくお願いいたします。

本センターでは、拠点としての機能強化を図り、看護学教育に関する国内外の動向を共有し、各大学の教育の質改善のため、ホームページでの情報発信はもちろんのこと、個別指導や情報交換できるよう、下記のようなコンテンツ等を配信しております。

**・FDマザーマップ・支援データベース**
**（看護系大学のFDを支援するFDプランニング支援データベース）**
**・組織変革型看護学職育成支援データベース**
**（教育－研究－実践をつなぐデータベース）**

また、メーリングリストを改め「拠点インフォメーションメール」とし、看護系大学等との連携・協働のための情報発信力向上に努めております。受け付けは随時行っておりますので、担当窓口部署、窓口担当者名を記入の上、件名を「（○○大学）拠点インフォメーションメール登録申し込み」とし、**kango-cqi@chiba-u.jp**までお申し込みください。

**https://www.n.chiba-u.jp/center/**

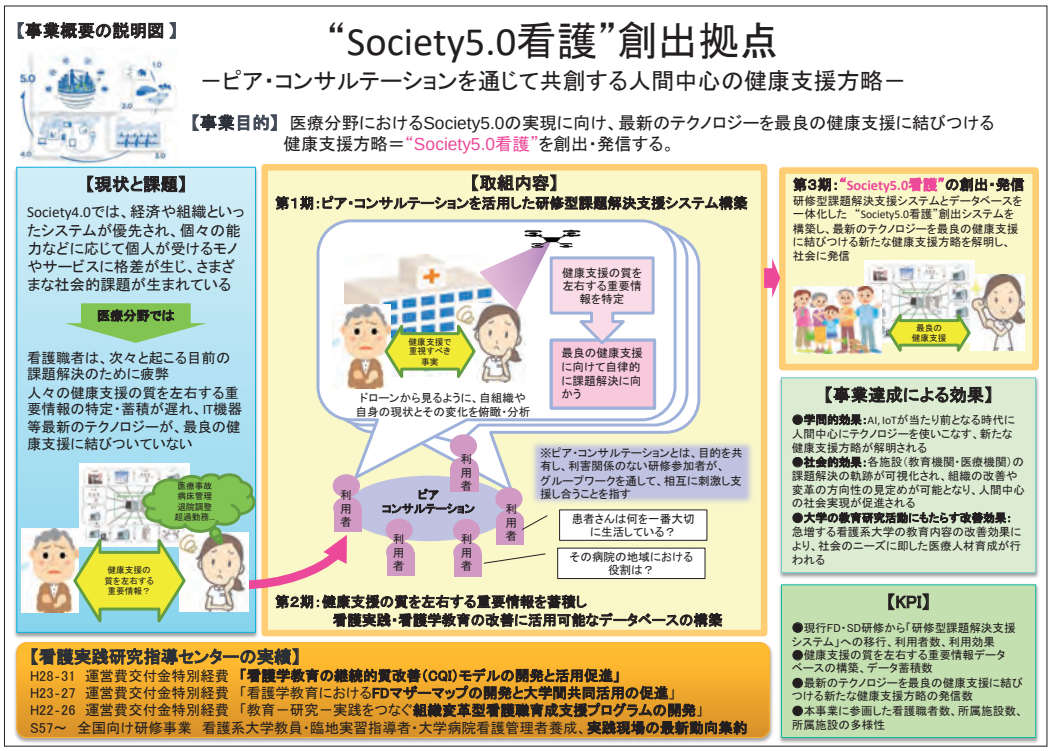
# “Society5.0 看護” 創出拠点
## ーピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略ー

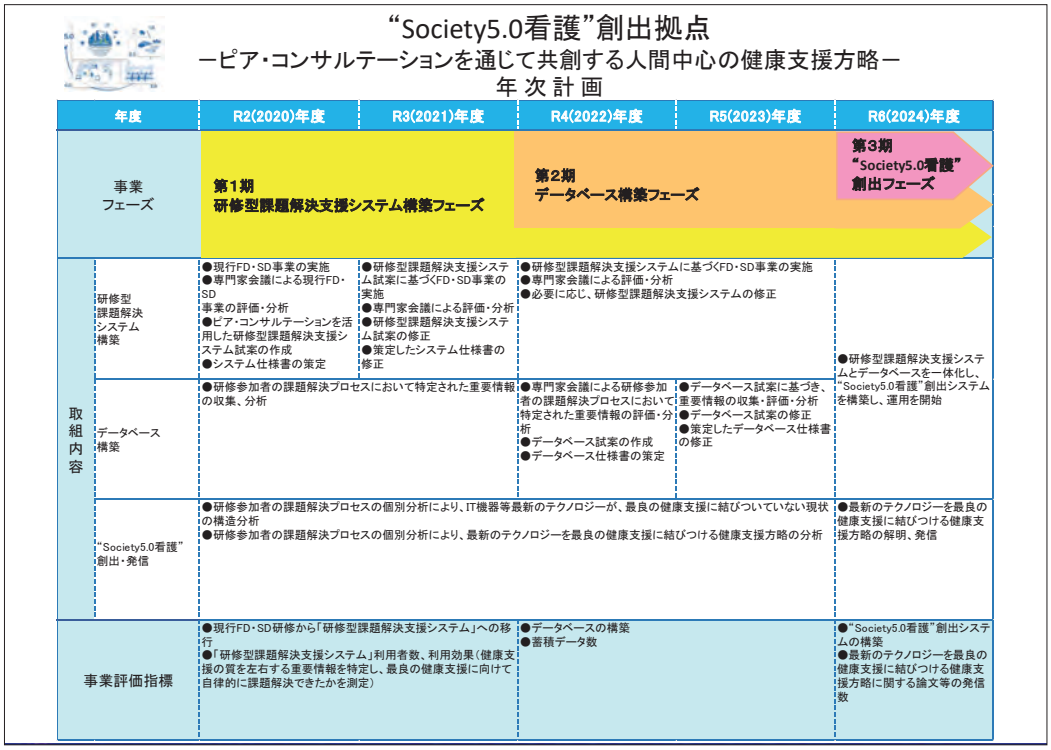
当センターでは、今年度より、「“Society5.0看護” 創出拠点ーピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略ー」事業に取り組んでいます。

この事業は、看護職者のピア･コンサルテーションを通じて、健康支援の質を左右する重要情報を特定し蓄積･活用できるしくみを構築することにより、最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける新たな健康支援方略＝“Society5.0看護” を創出･発信することを目的としています。

Society5.0に示されるように、サイバー空間とフィジカル空間の融合による経済発展と社会的課題解決を両立する、人間中心の社会を目指すことが求められています。しかし、最新テクノロジーの開発は進んでいるものの、特に医療分野においては、それを人間中心に活用できていない現状があります。この原因は、目覚ましい発展を遂げるテクノロジーの開発研究と、それを、人間中心に使いこなす方略に関する研究との乖離にあると考えられます。

本事業では、自らの力を発揮して生きたい、という人間が本来持つ真のニーズに即して、テクノロジーを人間中心に使いこなす方略を解明して、発信することを目指しています。



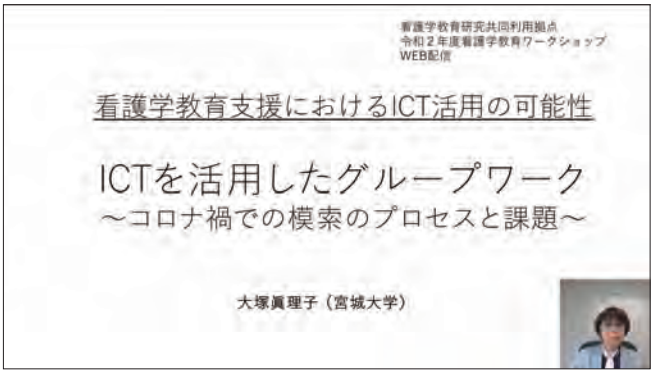


“Society5.0看護”創出拠点
ーピア･コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略ー
年 次 計 画

| 年度 | | R2(2020)年度 | R3(2021)年度 | R4(2022)年度 | R5(2023)年度 | R6(2024)年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 事業フェーズ | | 第1期 研修型課題解決支援システム構築フェーズ | | 第2期 データベース構築フェーズ | | 第3期 “Society5.0看護” 創出フェーズ |
| 取組内容 | 研修型課題解決システム構築 | ●現行FD･SD事業の実施<br>●専門家会議による現行FD･SD事業の評価･分析<br>●ピア･コンサルテーションを活用した研修型課題解決支援システム試案の作成<br>●システム仕様書の策定 | ●研修型課題解決支援システム試案に基づくFD･SD事業の実施<br>●専門家会議による評価･分析<br>●研修型課題解決支援システム試案の修正<br>●策定したシステム仕様書の修正 | ●研修型課題解決支援システムに基づくFD･SD事業の実施<br>●専門家会議による評価･分析<br>●必要に応じ、研修型課題解決支援システムの修正 | | ●研修型課題解決支援システムとデータベースを一体化し、“Society5.0看護”創出システムを構築し、運用を開始 |
| | データベース構築 | ●研修参加者の課題解決プロセスにおいて特定された重要情報の収集、分析 | | ●専門家会議による研修参加者の課題解決プロセスにおいて特定された重要情報の評価･分析<br>●データベース試案の作成<br>●データベース仕様書の策定 | ●データベース試案に基づき、重要情報の収集･評価･分析<br>●データベース試案の修正<br>●策定したデータベース仕様書の修正 | |
| | “Society5.0看護”創出･発信 | ●研修参加者の課題解決プロセスの個別分析により、IT機器等最新のテクノロジーが、最良の健康支援に結びついていない現状の構造分析<br>●研修参加者の課題解決プロセスの個別分析により、最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける健康支援方略の分析 | | | | ●最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける健康支援方略の解明、発信 |
| 事業評価指標 | | ●現行FD･SD研修から「研修型課題解決支援システム」への移行<br>●「研修型課題解決支援システム」利用者数、利用効果（健康支援の質を左右する重要情報を特定し、最良の健康支援に向けて自律的に課題解決できたかを測定） | | ●データベースの構築<br>●蓄積データ数 | | ●“Society5.0看護”創出システムの構築<br>●最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける健康支援方略に関する論文等の発信数 |

# 看護学教育ワークショップ

令和２年度看護学教育ワークショップは、「看護学教育支援におけるICT活用の可能性」をテーマに、COVID-19パンデミックによる感染予防のためにWeb開催となりました。講演はオンデマンド配信により令和2年10月21日(水) ～ 11月10日(火)、グループワークはZoom会議(ブレイクアウトルーム)により令和2年10月27日(火)に実施しました。講演の申し込みは247人、のべ1,195回視聴され、グループワークには31大学から32名の看護系大学教員が参加しました。

講演内容は3本で、1.「ICTを活用したグループワーク～コロナ禍での模索のプロセスと課題」宮城大学看護学群の大塚眞理子教授、2.「ICTを活用したシミュレーションラーニングの実際」東京医科大学医学部看護学科の阿部幸恵教授、3.「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う対応についての解説」文部科学省高等教育局医学教育課の髙橋良幸看護教育専門官から、オンデマンドによる講演が行われました。10月21日からの3週間にわたり、いつでも何度でも視聴できたこと、資料も見やすく聞きやすかったこと等が好評でした。グループワークは参加教員がワークの進め方の説明を全体で受けた後に、設置主体、所在地などの異なる5 ～ 6名の少人数のグループに分かれ、本学の教員がファシリテータとして入り、看護学教育支援におけるICT活用の可能性をテーマに、ワークシートを活用しながら自大学のCQI推進の方策を導くための討議を行いました。全体評価では、Webで全国の大学の教員との交流ができたこと、他のグループの話し声などがなく落ち着いてディスカッションできた、思ったよりメンバーを近くに感じることができた等の感想が寄せられました。ここで、グループ別まとめの主な内容を紹介する。グループXでは、CQIワークシートを用いて自大学を俯瞰的にとらえなおしたうえで、自大学の課題や気になっている点を紹介し利害のない協調関係のもと相互に意見交換を深めたことにより、自大学の潜在力に気づけた。グループYでは、「ICTを活用し鍛えた思考をどのように臨地実習につなげられるか」をテーマに話し合い、最終的に、臨地実習の時間が限られていても、ICTを活用して鍛えた思考を臨地実習に持ち込み実施し、学生は自身のケアについて振り返るといった、臨地と学内それぞれの利点をいかし、教育効果を最大限に高めるようなベストミックスを、各大学の状況に応じて創り上げていくことができるのではないかという結論に至っている。ICTの活用はあくまでツールであり教育目標に照らしてどのように使用していくのが良いかという点を大切に自大学で推進するために、ニューノーマルな時代における看護学教育を考える教員同士の相互支援の場をICTの活用により創設することができました。参加校の教員の皆様方とつくりあげたこの貴重な体験を来年度にも活かして継続してまいります。

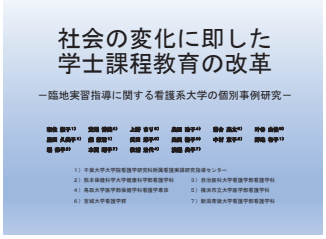


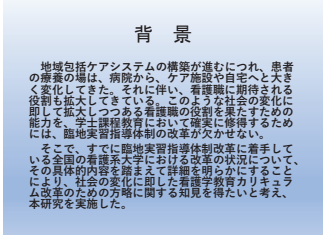
# 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究
## －学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究－

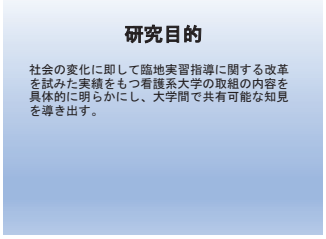
当センターでは、2018年度より、文部科学省調査研究委託事業「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究－学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究－」(2018 ～ 2020年度)を受託し、研究を実施しています。

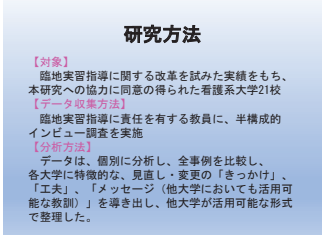
この研究プロジェクトは、看護系大学が、地域包括ケアシステム構築等社会の変化に即して、臨地実習指導体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築する方略を解明し、普及することを目的とし、当センターが、宮城大学・新潟青陵大学・横浜市立大学・鳥取大学・熊本保健科学大学と共同で実施しています。

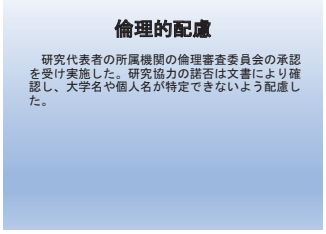
今年度は、全国の21の看護系大学にご協力いただき実施したインタビュー調査の結果を、第40回日本看護科学学会学術集会にて発表しました。最終報告書は、現在、取りまとめている最中です。今年度末には、成果を全国の看護系大学の皆様にご報告できる見込みです。

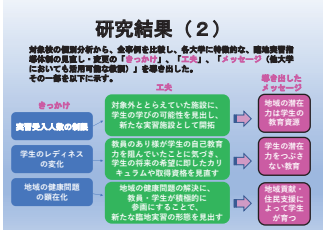


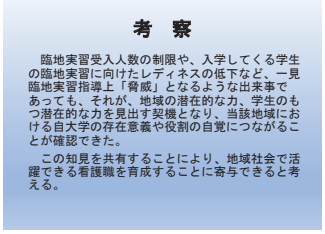






# 着任のご挨拶

講師　髙木（たかぎ）　夏恵（なつえ）

2020年4月より、千葉大学大学院看護学研究科附属 看護実践研究指導センターに着任いたしました。2020年は、ピア・コンサルテーションを柱にしたセンター事業の改革躍進年でありましたが、COVID-19の世界的大流行を受け、社会活動や生活様式が一変する大転換の年となりました。大きな環境変化に順応すべく、私たちは自らの力で免疫力を高め、ウィルスに負けない健康づくりと、そのための生活の在り方が注目されています。Withコロナ、Postコロナのこれからの社会では、「個人の持つ生命力が最大限に発揮された状態に向け、生命力の消耗が最小となるよう生活過程を整える」看護が、これまで以上に期待されていると思います。本センターは、看護学分野では国内唯一の「教育関係共同利用拠点」でありますので、多様な場所で活躍する看護職者、看護教員と共に、組織の垣根を越え、実践－教育－研究をつなぐ看護ネットワーク構築の実現に向け、微力ながら貢献していきたい所存です。

また、センターが新たに掲げる「共創」の理念のもと、バージョンアップした研修事業等を通じて相互に刺激、発展し合いながら、「Society5.0看護：テクノロジーを活用した新たな看護の創出」の実現に貢献できるよう、精一杯努めて参ります。

どうぞ宜しくお願い致します。

発　行
看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
〒260-8672　千葉県千葉市中央区亥鼻 1-8-1　ＵＲＬ：https://www.n.chiba-u.jp/center/
TEL：043-226-2464･2377(総務第三係(センター研修担当))　E-mail：nursing-practice@office.chiba-u.jp